

皮膚科のトリビア

211

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaで
もとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったこと
から「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」
となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉
として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載
しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●日本皮膚科学会第898回東京地方会から 令和3年10月16日

PVL産生性市中型MRSAが 壊死性膜炎の原因だった

20歳代の男性。カミソリによる剃毛のあとにいくつかの毛包炎を生じた。1週間後に急速に右大腿の腫脹と疼痛が生じ、壊死性筋膜炎と診断。細菌培養ではStaphylococcal cassette chromosome mec (SCCmec) IV型, Panton-Valentine Leukocidin (PVL) 陽性, arginine catabolic mobile element (ACME) 陽性で, USA300クローンだった。

北米を中心に流行している強毒型で、米国ではこのクローンによる壊死性肺炎や敗血症による死亡例が増加している。

一言コメント

「PVL産生性MRSAといえば、若年健常人に生じ、ときに家族内発生をきたす再発性の“癰”の原因菌として重要だが、壊死性筋膜炎の原因にもなるということで、注意しなければならない。」

●日本皮膚科学会第898回東京地方会から 令和3年10月16日

pachyonychchia congenitaの 遺伝子変異とサブタイプ

pachyonychchia congenitaはケラチン6遺伝子の変異で生じる疾患である。6A, 6B, 6C, 16, 17のサブタイプが存在し、全体に占める割合は6Aが39%, 16が32%, 17が17%, 6Bが9%, 6Cが3%である。

6B, 16は足趾の爪甲肥厚はあるが手指の爪甲肥厚が少なく、6Cでは手指の爪甲肥厚がないのが特徴。口腔内白板症の合併は6Aに、嚢腫と新生児歯の合併は17に比較的特徴的とされている。

一言コメント

「こんなにいくつものサブタイプがあるとは知らなかった。ロスバスタチンの内服で角質肥厚が改善したという報告があるらしい。」

●日本皮膚科学会第898回東京地方会から
令和3年10月16日

circumscribed palmar
hypokeratosisは女性に多い

高齢女性の右拇指球に生じた不整形の紅色陥凹局面。液体窒素凍結12回で治癒した。多くは特発性であるが、HPV4型が証明された例がある。

中高年の女性に圧倒的に多く、本邦の報告例25例のうち、女性が22例。平均年齢は73歳。単発例が19例、拇指球部に生じた例が20例などの特徴がある。

一言コメント

「陥凹した病変が液体窒素で改善するというのも、以前から不思議に思っている。高齢女性に多い理由は何が関連するのだろう。pitted keratolysisとは関連しないのか？など、不思議な疾患である。」

●第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会
から
令和3年11月13日

イソニアジド内服中はチーズ、
ワインを避けること

イソニアジドはモノアミン酸化酵素(MAO)阻害薬で、使用中にチーズやワインなどチラミンを多く含む飲食物を摂取すると、チラミンの代謝が阻害され、発汗、動悸、上腹部痛、頭痛、血圧上昇、悪心、嘔吐など、チラミン中毒の症状が惹起される可能性がある。

一言コメント

「TNF阻害薬やJAK阻害薬が皮膚疾患の治療に使われるようになり、使用前検査で陳旧性結核が確認できれば、イソニアジドの内服が必須になる症例もあるだろう。チラミン中毒という病態があるとは知らなかった。記憶にとどめておこう。」

●第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会
から
令和3年11月13日

経口避妊薬による片側性の
毛細血管拡張

2年前から月経不順に対し経口避妊薬を継続的に内服中。1年前から左前額部と左上眼瞼に限局した毛細血管拡張が生じた。unilateral nevoid telangiectasiaと診断。経口避妊薬を中断し、2カ月後に症状は改善した。誘因の除去によって改善する症例もあることに留意する必要がある。

一言コメント

「患者の治療希望があるかどうかで、皮膚病変の原因検索を怠ってしまうことも多い。内服の中断によって月経不順が悪化することの説明や対応をしっかりと行わないと、こういった成果は得られない。貴重な報告だった。」

●第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会
から
令和3年11月13日

入れ墨で生じるサルコイドーシス
は黒が多い

30歳代男性。入れ墨を入れてから18年ほどが経過したのち、リンパ節腫大(bilateral hilar lymphadenopathy : BHL)と眼サルコイドーシス発症。プレドニゾン(PSL)40 mg/日で加療を行っていた。30 mgに減量したところで黒の入れ墨に一致して紅斑と結節が生じ、痛みと強い痒みを伴った。生検の結果は類上皮細胞性肉芽腫。PSLのほかメトトレキサートの内服を要した。これまでに刺青サルコイドーシスの報告は18例あり、入れ墨を施してから発症までは平均13.8年。16例中10例で黒の入れ墨の部分に肉芽腫を生じていて、14例中9例でPSLの内服を要している。

一言コメント

「赤の入れ墨の部分に肉芽腫を形成した症例をみたことがある。刺青肉芽腫は赤、多分水銀に対する反応が多いような印象があったが、サルコイドーシスに至る例は黒(炭素?)が多いとのこと。何か微妙な違いがあるのだろう。」